校歌 詩人の願いに光

作詞の三好達治 講演テープ確認

「浜名高生 清く平らな心で」

60年経て肉声届く

昭和を代表する詩人で、浜名高（浜松市浜北区）の校歌を作詞した三好達治が1957年、校歌完成を記念して同校で行った講演の内容が約60年ぶりに確認された。東京都在住の男性が本年度の始業式前、編集者だった父親の遺品の録音テープを同校に送った。歌詞で書かれた風景描写が実は生徒を励ますための比喩だったという三好の真意も判明し、同校ゆかりの人たちは「貴重な資料だ」と喜んでいる。

講演は校歌完成の翌年に行われ、三好が「水清ら　四時平らに　天つ空」といった歌詞で浜名湖を描写しつつ、清く平らな心で学問に向き合ってほしいという願いを込めたなどと解説。作詞の際のエピソードも冗談を交えて披露し、生徒の笑い声も録音された。

校歌作詞のきっかけは53年。学制改革で校名が変わり、校歌がなかった浜名高で、野球部の地方大会での活躍を機に制定を求める声が高まった。また、生徒らが国語の授業などで読んだ三好の詩「大阿蘇」にも人気が集まっていた。鈴木周一教諭（故人）が何度も作詞を依頼した経緯は、講演で三好も語った。

テープは東京都町田市の熊木和也さん(68)が、編集者で三好と関係が深かった父・勇次氏の遺品でオープンリール式の物をCDに復元し、インターネットで調べて浜名高にたどり着いた。勇次氏に宛てた鈴木教諭の手紙も発見された。三科真弓校長が始業式で紹介し、生徒も関心を高めている。生徒会長の中沢秀太さん（3年）は「学校と校歌がより好きになった」。大石健太郎さん（同）は「偉大な詩人が優しく語りかけていて親しみが持てる」と話す。

三好の講演の詳細は長年不明だったため、同窓会は保存や普及の方法を検討中。福田幹男会長(69)は「歌詞の真意が知れて感動した。多くの卒業生にも伝えたい」と感慨深げに語る。

CDで復元された三好達治の講演に聞き入る（左から）大石健太郎さん、中沢秀太さん、福田幹男会長、三科真弓校長。手前はオープンリールテープと鈴木周一教諭の手紙＝4月中旬、浜松市浜北区の浜名高

三好達治（福井県ふるさと文学館提供）

＜メモ＞三好達治（1900～64年）は大阪市出身の詩人。三好に関する資料を所蔵する福井県ふるさと文学館によると、叙情的な作風で知られ、代表作の詩集「測量船」には「雪」や「春の岬」などが収められている。校歌の作詞では浜名高のほか、福井県立三国高や同県立大野高、東京工業大などにも携わった。